

はじめに

『大島筆記』は、土佐宿毛の大島（高知県宿毛市）に繋留された琉球楫船の乗り組み員からの「聞書」と、求めに応じて琉球側から提出されたと考えられる資料を基にまとめられた書である。その間、土佐からの質問（訊問）に主に応じたのは、楫船の頭役である潮平親雲上であり、それをまとめたのは土佐藩の儒者、戸部良熙である。琉球船は宝暦十二年（一七六二）の年に「春立楫船」として鹿児島に向かっていたが、途中逆風に遭い土佐の柏島沖（高知県大月町）を漂流していたのを発見されて、薩摩からの迎えがくるまで宿毛の大島に繋留されたのである。

教授館本『大島筆記』（国会図書館蔵）の構成は、第一巻が「漂着之次第」として、乗船者の名簿、土佐漂着までの経緯、乗船者のうちの土族等の人物紹介とその大要等が記されている。第二巻が「琉球国体／人物風俗／年中大略／官位之事／朝服之事／地名／三十六島／諸産物大様／琉語大略」で、これが近世琉球の地誌全般を記している。第三巻が「雑話上」で「琉球人」からの琉球を中心にした「聞書」、第四巻が「雑話下／附録／再考／出会詩歌／絵図」で、「雑話下」は「琉球人」からの中国情報の「聞書」、「附録」は一七〇五年に土佐清水へ漂着した琉球船の乗船者からの「話録」が参考として収められている。「再考」は戸部が「聞書」等をまとめた後、改めてその内容を検討した記事、「出会詩歌」は戸部を含む土佐側と「琉球人」との漢詩と和歌の遣り取り、「絵図」は正装した「琉球人」の「琉球

人冠服大帯之図」や潮平等が乗った琉球船「春先楫船并伝間之図」、琉球船に祀られていた「天妃神之像」等である。第五巻は「琉球歌／琉球人和歌／雨夜物語／永峯和文」で、「琉球人」の文芸である琉歌、和歌、和文が収録されている。「琉球歌」は最も早い時期の語注が付いた琉歌集であり、「琉球人和歌」はいわゆる「琉球物」に収録された江戸立（江戸上り）の使者達が江戸往還の時の歌枕の地で詠んだ和歌とは異なる歌が収録されている。「雨夜物語／永峯和文」は、貴重な「琉球人」の和文である。これらは、一級の琉球文学の資料である。また、第二巻にある「琉語大略」は「琉球物」に入った琉球語資料とは明らかに質量を越えた豊富な琉球語が収録されている。絵図にしても、渡唐船に乗せられていた「天妃」（媽祖）が、琉球楫船にも載せられていた重要な事実を示している。

これを見ただけでも、『大島筆記』は近世琉球全般のまとまった地誌資料であり、「琉球人」が語った貴重な琉球情報、日本の知識人の興味によく応えた中国情報、さらには琉球と土佐との交流の様子や「琉球人」の文芸等が収録された重要な資料であることが分かる。研究篇ではこれらの重要な記事の一端が取り上げられて、論考が展開されているが、特に「聞書」が主に記されている。「雑話上」「雑話下」は、興味深い記事が詰まっている。本書の題名を「琉球船漂着者の「聞書」「世界」としたのも、これらの記事に重要な情報が多くあることによる。潮平等は相当にうち解けた様子で、戸部達の質問によく応え、時には土佐からの質問を越えて饒舌に語っている。そのような「聞書」の世界は、琉球王府が編纂した資料では窺えない様々な情報を私たちに与え、近世琉球と琉球を取り巻く中国や日本との交流・交叉の世界を想像させる。『大島筆記』は、日本側が間接的な琉球情報を元にして叙述した「琉球物」とは質を異にする書である。そして、それは近世琉球の文化史を紐解く一級の資料、あるいは琉球を介し

た近世期の貴重な中国情報の書、そして江戸期の琉球認識を考える書にもなっている。

本書『琉球船漂着者の「聞書」世界』——『大島筆記』翻刻と研究——は、教授館本（土佐藩教授館旧蔵）の『大島筆記』の翻刻と『大島筆記』を知る上で参考になる資料『琉球船漂恙（着）記』（高知県立図書館所蔵、『大島筆記』と同じ、一七六二年の琉球船漂着記録）、『大島筆記』を記した戸部良熙の随筆『韓川筆話』から琉球関係を抜き出した『韓川筆話』【抄】、そして一七九五年の琉球船土佐国漂着「聞書」資料である『琉球人話』（五藤家文書、史料番号5016、琉球人認出書付写 琉球地誌等、安芸市立歴史民俗資料館所蔵）を附録として翻刻し、『大島筆記』にかかわる六本の論文を収録している。

これまで、『大島筆記』は『日本庶民生活史料集成 探検・紀行・地誌（南島篇）』第一巻（三一書房一九六八年）に収録されているものが利用しやすいこともあって、これが使われることが多かったと思われるが、『日本庶民生活史料集成』の『大島筆記』（白川本、京都大学図書館所蔵）は、本書で翻刻した教授館本『大島筆記』と比べると「雑話下」が大きく二箇所、九丁余り、三十条にもわたって欠落している。このために、資料としては大きな欠陥がある。また、語句に附されている読み（ルビ）も、相当に落ちている。翻刻の校異ではいちいち示していないが、読み（ルビ）の脱落、および漢詩・漢文に入った訓点の脱落は、善本のひとつだと思われる山内文庫本、内閣文庫本にも相当ある。さらには、構成に關しても教授館本では第四巻に入る「出会詩歌」と「絵図」が、山内文庫本、内閣文庫本、活字本では『大島筆記』の末尾にある「永峯和文」の後に入っており異同がある。そのために「永峯和文」の最後に記された和歌「あまさかる雲井のよその草まくら 思ひやるにもぬるゝ袖かな」が、山内文庫本等では、戸部良熙が「永峯」に「送別の和歌」を請われて詠んだ歌になっている。全体の構成からいって

も、第五は「琉球人」の文芸（琉歌・和歌・和文）を集めた巻であり、「出会詩歌」と「絵図」は第四巻にある方がよく、「永峯和文」に「出会詩歌」と「絵図」が続くのは、不自然だと思われる。加えて、戸部が「永峯」に「送別の和歌」を請われて詠んだ歌についても、「あまさかる」の歌よりも教授館本が記す「わかれてはたよりも波の沖津国 月の行衛の空やなかめむ」が、送別の歌として相応しいのではないか。すなわち、『大島筆記』の構成、記された項目、語句に附された読み（ルビ）等についても、教授館本が最も整った本のひとつであると考えられる。本書でこれを翻刻する意義は大きいと考える。

『大島筆記』の附録として翻刻する『琉球船漂志（着）記』『琉球人話』は、『大島筆記』が単に「聞書」を含めた琉球船の漂着記録、あるいは漂着報告書ではなく、よく構成が図られた琉球紹介の書、地誌であることを知ることができる参考資料である。さらに、『大島筆記』には記されていない琉球記事も記されており、有益である。また、『韓川筆話』抄』には、土佐を離れた潮平と戸部のその後の交流が記される記事（朝安氣之茗）がある。戸部は潮平等を鹿児島に送った後、茶好きの潮平に茶を贈り、潮平はその礼に「小翰」を添えて「清明茶しんみんさ」を送ってきたことが記されている。戸部の随筆である『韓川筆話』抄』にも興味深い記事が散見され、『大島筆記』の理解の参考になる。

研究篇に収められた六本の論文は、『大島筆記』にかかわる論考、あるいは『大島筆記』を資料とした論考である。巻頭の横山學「宝暦十二年琉球国船漂着記録『大島筆記』諸本について（改訂）」は、『大島筆記』の諸本の比較を論じた論文である。『大島筆記』の書誌的な研究の出発になる論である。島村幸一「土佐国漂着の琉球船「聞書」資料の世界——『大島筆記』を中心に——」は、一七六二年の漂着資料『大島筆記』を中心に置いて、その前の漂着資料（一七〇五年）とその後の漂着資料（一七九五年）

を重ねて、三度にわたる漂着の解説をしながら興味深い漂着者に焦点をあてた論である。また、三度の漂着資料にみる琉球の日本文芸享受を論じている。次の真栄平房昭「琉球人の唐旅見聞談について」は、「雑話下」等に見られる渡唐した「琉球人」の中国記事を論じた論である。何が見聞記事として記されるかは、こちら側が知りたい中国情報でもあつて、それは同時に琉球や日本の中国認識を探ることもなる。屋良健一郎「近世における琉球人の日本漂着」は、琉球船が日本に漂着した際の日本側の対応を論じた論である。『大島筆記』では直接には窺えないが、幕藩体制下において異国であつた琉球の漂着者は、特別な場合を除いて土佐への上陸を許されていない。嘉手苜徹『大島筆記』をめぐる唐手の「伝来」に関する「考察」は、『大島筆記』『雑話上』に記された武芸（唐手）についての論である。琉球の武芸にかかわる記事は、『大島筆記』が初出であるという。武芸だけではなく、『大島筆記』には茶、紙、酒、筆、硯、医術、生け花、絵画、書、文芸等、様々な文化史的な記事や、江戸立（江戸上り）、為朝関連記事等が満載されている。最後の橋尾直和「大島筆記」に記された琉球語」は、「琉語大略」を始めとする琉球語資料、あるいは語句に附された読み（ルビ）から当時の琉球語を探り、琉球語の変遷を論じた論である。以上、六本の研究は『大島筆記』が様々な分野に広がる貴重な資料を提供することが示されている。

高知を含め、琉球船の漂着資料は今後とも各地で数多く発見されることが期待される。そして、それによる様々な研究の展開が考えられる。本書の刊行がその切っ掛けの一端を担う書になれば、幸いである。

SAMPLE

目次

はじめに……………島村幸一(1)

第1部 翻刻編

大島筆記(国立国会図書館所蔵)……………3

附録『大島筆記』に関連する資料……………157

琉球船漂恙記(高知県立図書館所蔵)……………157

韓川筆話【抄】(国立国会図書館所蔵)……………168

琉球人話(安芸市立歴史民俗資料館所蔵)……………175

第2部 研究編

宝曆十二年琉球国船漂着記録『大島筆記』諸本について(改訂).....	横山 學	199
土佐国漂着の琉球船「聞書」資料の世界——『大島筆記』を中心に——.....	島村幸一	241
琉球人の唐旅見聞談について.....	真栄平房昭	315
近世における琉球人の日本漂着.....	屋良健一郎	349
『大島筆記』をめぐる唐手の「伝来」に関する一考察.....	嘉手苺 徹	373
『大島筆記』に記された琉球語.....	橋尾直和	415
あとがき.....	島村幸一	452
執筆者一覧.....		457